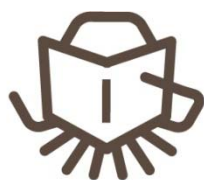


まち塾@まちライブラリー

徒然草



まちライブラリー
MACHI LIBRARY

磯井純充



はじめに

「まち塾@まちライブラリー」は、まだ生まれたての活動です。昨年春、ボチボチとゆるやかにスタートしました。その前の年、一昨年になりますが、ふとしたことで自分の人生の目標を失って苦しい思いで日々を過ごしました。

そんな折、何か自分に出来る事はないかと模索していると色々な人が助けてくれ、現在の活動が開始されたのです。今回、この冊子では、「まち塾@まちライブラリー」誕生の背景や意図を皆様と共有したくて稚拙な文章を書くことにしました。十分、ご理解いただけな

いところやご異論がある方も多々おありになるかと思いますが、どうぞ私的な活動での世迷言と受け流していただければ幸いです。そしてこの「まち塾@まちライブラリー」が、何かに悩んでいる人。何かを得たいと模索している人。新たな出会いを期待している人。真摯に生きようとしている一人一人の人にとってヒントや勇気を出すきっかけとなってくれることが私の何よりの「ゆめ」です。

そして元気に学び合う「学縁」の仲間になっていただければ幸いです。

まち塾@まちライブラリー

提唱者 磯井 純充

第一編 発想の源（みなもと）

- 常識を疑え
 - 二十六歳の師匠、五十二歳の弟子
 - 問題は「タコつぼ」ではなく
 - 「タコ」だった
 - 身近な人から学ぶ
 - 自分経営ゼミ
 - 女と男の違い
 - 教えるのではなく、学び合う
 - 「住み開き」の発想
 - 大阪のおばさんと「あめ（飴）」
 - 成長神話
 - グローバル化が生き残る道？
- 米国からみたグローバル市場
 - 大きくては生き残れない？
 - コンビニとマニュアル
 - 「組織」より「個人」が勝つ時代
 - 成長戦略の信長、秀吉 成長を止めた家康
 - 「ゴール」や「意義」は必要？
 - 「まち」を背負う人は「邪魔もの」に、
「まち」に生きる人は「要」になる
 - 「分母」を求めるのか「分子」になるのか
 - 図書館は「神様」を「本」から「人」へ

第一編 発想の源（みなもと）

■常識を疑え

常識とは何か。辞書で見ると『社会の構成員が有している当たり前のものとして、価値観、知識、判断のこと』と書いてある。当然、構成員が変われば、変わるもので、常識は決して普遍的な価値観でも知識でもない。これが分かりだすと色々なことが見えてくる。「構成員が有する」ということは、その「組織」や「社会」場合によっては「国」や「時代」が変われば構成員も変わり、常識も変わるということだ。だがこれは、頭でわかっても身につけるのは非常に難しい。学生時代にこんなことを教えてくれた社会学の教科書があった。「ロシアの農奴は、非常に非生産的なのでイギリスの資本家が、農奴をより効率よく働かすために時給を上げる提案をした。『今

までの時間給を倍にする』これによって彼らは倍の生産性をあげるに違いないとイギリスの資本家は考えた。

しかし農奴たちは、時間給が倍になるなら終日働くより、半日で今までの現金収入を得て、残りの半日は歌やお酒を楽しむ時間にしようと考えた。これはいかなる故か」というものであった。資本主義の世界では、労働生産性を上げ、拡大再生産を図ることは「常識」である。その為には、労働者をより効率よく働かせるために報酬をあげ、モチベーションを上げるのも手段であると考える。労働者もより多くの報酬を得て、購買力を上げ豊かな生活をしたいと考える。しかしながら、資本主義的発想が根付いていないロシアの農奴にとっては、収入を上げて購買力を上げるよりも生活を楽しむ価値観が優先したために前述のようになったのだ。このように「常識」は、その社会、組織、環境の中では、まったく違

ったものになる。現代社会の「常識」。それも一握りの人達の「常識」を振りかざして政策や企業経営をしようとするから真逆の結果が生まれているのかもしれない。そんな「常識」を疑うことから「まち塾@まちライブラリー」は誕生する。

■ 二十六歳の師匠、五十二歳の弟子

挫折とその後の喪失感。生きることさえ苦痛になった折に一人の若者と出会う小さな勉強会。ヒルズの中の教室でそれははじまった。普段は、成功を勝ち誇った人たちが自慢話を披歴するそんな感じの勉強会。その日のスピーチ力は、そんな常識を覆すような話をしはじめた。大学を出て勤めていた地域コンサルタントの職を辞し、アパートを引き払った。その直後に彼は、思いついたように富山を目指

す。ただそこに知り合いがいるというだけで。金もなく練馬インターチェンジでヒッチハイクしようとした彼は、近くのコンビニに入り、画用紙とマジックを買って、「富山」と書きはじめたらしい。それを後ろから見ていた近所の親父が、声をかけ自分の田舎も「富山」だから家によって酒でも飲んでいけと声を掛ける。その求めに応じた彼は、夜中までその家で振る舞い酒を飲んですっかり打ち解けたころ、その親父と二人でヒッチハイクを再開。ようやくの内につかまった車を皮切りに彼の旅ははじまる。行く先々で仕事を手伝い、かわりに食事や寝床の用意をしてくれる。更に次の訪問先を紹介してもらいヒッチハイクの旅が続く。こんな調子で六か月の間、沖繩から北海道まで全国約八十を越える村、村を人とのつてと、思いやりをもとに歩き廻ったという。なんとも言えない衝撃が体突き抜けた瞬間だった。この若者が、友廣裕一さんだ。それ

以来彼は私の「師匠」。私は、押しかけ「弟子」として彼の行くところ、誘われるところを一緒に歩き廻ることにした。二十六歳の「師匠」、五十二歳の「弟子」。そこから「まち塾」が生まれてきた。

■問題は「タコつぼ」ではなく、「タコ」だった

友廣さんが紹介してくれた友成真一さんの本のタイトルである。友成さんは、通産省（現・経産省）の官僚を二十五年務めた後、早稲田大学の教授になったという。彼の視点はこうだ。「問題解決をマクロの視点でしようとしても意味がない。問題の本質は、個人というミクロにある。個人の生き方、考え方を徹底して汲み取りそれをサポートしていく中で問題は解決される。ミクロからのアプローチこそ

が問題の本質を突き抜ける手段である。」という。

よく政治が悪いから「ゆめ」を持ってないとか、社長や経営者が不甲斐ないので仕事はかどらないとか、地域を良くするためには自治体や地域組織を改革しなければ先には進まないと考えがちである。しかしそういったアプローチをせず、自らは何をやりたいのか、どんな「ゆめ」を実現させたいのか、個人の視点を立脚点にした「自分経営」を説いているのである。「他人は変えられない。変えられるのは自分だけだ。」視点の変換をして新しい世界観を持ち得るといふ考えに共鳴したのだ。その為「タコつぼ」にいる自分を認識して、その「タコつぼ」から出て素ダコになることが大切だと友成さんは説く。「まち塾」の目指すべき方向性を見いだせた瞬間である。

■身近な人から学ぶ

人は、いつの世にも成功した人、名前が売れている人、社会的に地位の高い人に憧れ、羨ましく思い、同時にその人に近づこうとする。どうしたらそのような成功ができるのか？その人の傍にいと何かうまい話が転がっているのかもしれない。私が、かつてヒルズでやっていた文化活動もこのような人の心理を巧みに利用して人を引き付けてきた。有名大学や有名企業が参画していることによるブランド戦略である。しかし、そういった装置で救われる人は、ほとんどいない。むしろその人の「ゆめ」に自分の「ゆめ」をダブらせている姿がここかしこにみられる。私もその一人だった。

■自分経営ゼミ

友成さんの授業では、「自分経営」ゼミがある。各自が自分の「ゆめ」を語り、その「ゆめ」を他の人が真剣に受け止め、それを「YOU ME」（ゆめ）シートというものにメッセージとして書き出し、うやうやしく受渡をしていく方式がとられている。一見するとそれだけのことか、と思いがちであるがこの作法の中にいくつか重要なメッセージが含まれている。まず人の話をその人の視点で聞くという目線である。決して自分の視点ではなく、相手の視点で「ゆめ」を聞いていく。それが一番大切なポイントだ。次にそれを言葉でなく、書き出し、うやうやしく受渡をするということである。渡す方も受ける方も対等な立場であることの再認識である。話をする人が偉いのもなく、聴き手がよく分かっていてアドバースしているのでもなく、「ゆめ」を語った人

をサポートしながら支え合っている図式である。このやりとりが、「自分経営」の真髄である。

■女と男の違い

女は男になれない。男は、女になれない。基本はそうだ。もちろん性転換などを経てトランスファーする人も稀にはいるが、普通はこの一線は変えられない。他の枠組み、例えば「会社」や「住む地域」や「国籍」といったものは、移動できる類のものである。それぞれの枠組みに応じたものの見方、感じ方ができるものだ。しかし、女と男の壁は生涯ついてくる。双方のコミュニケーション・ギャップが生まれやすいのは、このためである。古今、多くの人がこの枠組みになやみ、枠組みを乗り越えた相互理解をしようとした。この

不思議な綾を楽しんだり、苦しんだりしてきた。友成さんの研究室にいた夏目承さんは、女性新聞記者としてこの問題の研究をしている。彼女の言葉をかりると、「女と男の意思疎通の難しさは、自分と他人との意思疎通の難しさの原点を教えてくれる」というものである。「男は、タコつぼにこだわるが、女は相手との関係性にこだわる」と聞いてもやはり「女」を理解するのは難しい。それは私が、男だからだ。他人を理解することの難しさを経験すればするほど他人にやさしくなれる。それが、「まち塾」の考え方になる。

■教えるのではなく、学び合う

人と人は、一方が情報を発信し、一方がそれを受け取るという関係に留まらない。どんな関係性であってもお互いの情報を交換し合う

ものである。先生と生徒であつても「教える」「教わる」中で相互に情報をやり取りしている。人により、場所により、人の反応はいつも変化する。それこそが人と人が出会う大事な点である。よく「情報」という言葉に二つの意味が隠されているという。「情報」の「報」という字には、事象を記した事実関係が、もう一方の「情」には、冗長性が加味された感覚が入っているといわれている。例えば、人に頼まれて『荷物を誰々に届けた』という報告をしても「情報」の「報」に関する伝達が行われたことになる。受け取った人の表情や言葉、その場での状況を加味してはじめて「情報」になる。いつの世にも顔を突き合わせてのコミュニケーションが他の手段より優れているのはこの点にある。「まち塾」では、可能な限りお互いの顔が見える規模と各々の感性が伝わるように工夫したい。教えるのではない

く参加者全員が「学び合う」ことの大切さを大事にするのが「まち塾」の目標だ。

■ 「住み開き」の発想

大阪人、私もその範疇に入るらしいが、その大阪人の特色に「境界領域」の緩さがある。はじめて会う人でもひとたび会話を交わせば、そこには長い付き合いがあったかのような親しみと厚かましい物腰がうまれてくる。お互い遠慮するでもなく「境界領域」を狭めていくのである。そんな大阪人が提案したコンセプトが『住み開き』である。自宅や職場の一部をセミパブリックな「場」に転換してことを指している。

ある人は自宅のマンションのリビングを「古本屋」に。ある人は、自宅の一角を「洞窟博物館」にして不定期に開放している。別の人

は、印刷屋の2階をイベント・スペースにしたり、亡くなった祖母の居間をそのままコミュニティ・スペースにし、それぞれ思い思いの『住み開き』をやっている。これをアサダワタルさんという音楽家兼アーティストが『住み開き』と称してパンフレットにして紹介、見学ツアーまでやったそうだ。この「境界領域」を狭めるという発想から「まちライブラリー」のアイデアが生まれる。

■大阪のおばさんと「あめ（飴）」

大阪人の中でも更に「境界領域」を狭める天才がいる。それが「大阪のおばさん」。この人たちは、必ず飴を持ち歩いているといわれている。地下鉄で喫茶店や食堂で横に座った人に自然な形で飴を渡して赤の他人を家族のように取り扱う「技」である。これにヒントを

得たのが「まちライブラリー」の仕組みである。現代社会では、大阪のおばさん以外は、ふつう赤の他人との会話を避けたがる。たとえば「お隣にすわったから」といって声を掛けるのは都会ではきわめて奇異なこととみなされる。それで「同じ場所で長時間一緒にいても赤の他人」ということになる。住まいがお隣でも挨拶もなければ顔を見ない人もたくさんいる。そこでひと工夫。「本」にメッセージを付けて持ち寄る、共通の本棚を用意する。その「本」を交換しあうことによってお互いの考えを少しだけ交換する。そこから生まれるご縁を大切にして「赤の他人」が「気心の知れた仲間」に変わる。そんな狙いを「まちライブラリー」には託したい。

■成長神話

生まれてからこの方、『成長』なくして『幸福』はないと言われてきた。果たしてそうだろうか。日本は、毎年3%成長する潜在能力を持っている。それができないのは、政策が間違っているからである、というようなことがかつてよく議論された。でも冷静に考えると全ての国、地域で毎年3%成長すると二十五年で世界は倍の規模になる。更に次の二十五年で現在の四倍になる。いつまでこれを続けるのか。また、続くのか。人々は、疑問にも不安にもなってきた。私の不得手な数学を思いだす。対数である。対数曲線という曲線が教科書にあったのを覚えている。でもその教科書の大きさには限りがある。永遠に成長するとこの対数の曲線は永遠に長くなる。無

限に大きな教科書のページを創らない限り曲線の行先はない。これと同じことを世界経済はやろうとしているのではないだろうか？
いつになれば身長が止まることを認める自分に戻れるのだろうか。「まち塾」で考えてもらいたいテーマである。

■グローバル化が生き残る道？

一定の規模の枠組みで成長が鈍化するか止まりだすと次の枠組みを求めて移動をはじめ。古今東西、生物としての人の性（さが）である。現在言われているグローバル化は、別に新しいことでもなんでもない。規模の違いは別として一定規模の市場（餌場）を食い尽くすと次の市場（餌場）を求めて拡大していくことになる。ところが現在のグローバル化には二つの価値観が混在している。世界と交わ

り、人的にも物的にもやり取りをする。多様な人、物や文化が交わる世界である。一方、市場の拡大と生産拠点の最適化という名目のもと、市場の占有と安い労働資源の獲得に動き出す流れが果たしてどこまで続けられるのか。自分のものは、自分のもの、相手のものは自分のものという身勝手な理屈が垣間見られる。征服と被征服の関係性には永続性がなないように思うのだが。生き残るのではなく、生かされ続ける関係性が求められているように思う。

■米国からみたグローバル市場

米国は、ヨーロッパからの移民が中心になって成立した国であることは誰でも知っている。三つ子の魂ではないが、より良い生活を求めて新大陸に上陸し、更に東から西へと移動し、

ついに太平洋を黒船で渡って日本にも来訪した国である。常にアメリカ的な世界の拡大を「ゆめ」見ている。あえていえば少年のような大志である。しかし、米国の外にいる相手の立場に心をはせられないのがこの国の性（さが）でもある。この永遠の少年といかに付き合うのか。日本の「永遠の少年少女」が参加する「まち塾」は、真逆の世界観を提案し、実行していけるのか？面白いことになってきた。

■大きくなくては生き残れない？

『企業合併と企業買収』。企業の生き残り戦略として、あるいは成長戦略として推奨されている。果たしてそうなるであろうか？建築でも巨大構造のものが効率がいまいかというところでもない。長い梁は、一定の長さで下から

支えてやる柱がないと折れてしまう。より高いビルを建てようとアジアや中東では、まだまだ競争が続いているが、高いビルになればなるほど下の階の柱は、太くなる。同様にビル内のエレベータの本数も増え、低層階の平面利用できる面積がどんどん減る。自動車のエンジンパワーをタイヤに伝える方式も同様である。ギアやカムシャフトを利用して複雑に伝達しているが、これも複雑にすればするほどエンジンのパワーが減衰する。大きな発電所、例えば原子力発電所を東京から遠くにづくらざるを得ないが、いくら大きな発電をしても送電しているうちにエネルギーの半分以上減衰する。ことさら物流でも動力でもエネルギーでもシステムが大きくなり過ぎると効率が落ちていく。過ぎたるは及ばざるごとしである。企業規模も同様であろうと思うが、経営学では、「抗力」とか「反力」という概念はないらしい。「推進力」は、「抗力」や「反

力」も生む。物理的な世界で「抗力」や「反力」があるなら「組織」や「企業」でもあるはずだ。大きくなくても、否、むしろ小粒でもピリッと辛い道もある。

■コンビニとマニュアル

コンビニは、便利でよく利用する。どのコンビニに行っても同じような商品があり、お弁当やスナックだけでなく日用品や野菜もおいである。若者だけでなくむしろ高齢者にとっても便利なスポットになっている。近くて、小規模で、商品も一人ないし少人数で利用するのに適した量にされている。駐車場に囲まれ、広々とした大型スーパーより利用しやすいともいえる。但し、気になることもある。どの店に入っても同じ受け答えするスタッフの人達である。「いらっしゃいませ」「ありがとうございます

「ございました」と元気に言ってくれる。でもいつも同じ。晴れても、雨でも、暑くても、寒くても、掛けられる「言葉」に変化はない。これは、会話ではない。よく仕事を覚えたい新人社員が、マニュアルがないと仕事が出来ないという。果たしてどうだろう。生きるとは、働くとは、考えてもらいたい。

■ 「組織」より「個人」が勝つ時代

資本主義が得手とするのは、拡大再生産である。素晴らしい夢もくれた。昨日より今日。今日より明日と日々収益があがり、豊かになれる。東インド会社が、世界ではじめての株式会社である。イギリスから遠くインドまで、香辛料をはじめ希少材の輸入をするためのリスクを分散させる必要性から生まれたといわれている。個人で負担しきれない巨大リスク

を分散しながら巨利を得る。大きなプラントを創る、長期な投資を必要とする。多くのマンプワーを必要とする。そんな事業をする企業運営するには、株式会社は最適である。巨大化するリスクとそれを支える組織が必要なる場合である。しかしながら個人のアイデアを尊重し合う製品やサービスを提供する場合に不向きだ。ホームページを作って新しいサービスや製品を売ろうとする時、巨大企業では、そのプロジェクトを立上げるだけでコストが顕在化する。これに対して個人ないしは少人数で思い思いの情報を発信した場合は、コストが顕在化しない。資本を必要とするのか、個々人の個性あるアイデアやビジョンを尊重してビジネスをやるのか。組織が有利な場合と個人が有利な場合の分かれ目である。企業や組織が、いつでも強いわけではない。時代が何を求めているのか？読み違えると大失敗になる。

■成長戦略の信長、秀吉、成長を止めた家康

「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」「鳴かぬなら鳴かしてみようホトトギス」「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」とは三人の性格の違いを表現するのに使われる。国づくりでは、信長・秀吉と、家康では明らかに反対の政策を打ち出した。成長戦略と均衡戦略である。信長は、三河に生まれた小大名として全国制覇の一手手前まで勢力を拡大した。当然、本人もその家来達も多額の利益を得た。秀吉も路線の継続をし、天下統一を成し遂げた。しかし拡大再生産をやり遂げるため海外戦略に出た。グローバル戦略である。アジアの時代を意識して朝鮮半島の支配を視野にいられたの拡大戦略である。これにより信長以来の成長戦略を維持しようとしたが結果大失敗

に終わった。当然、大きな反動が起こる。戦時体制から平時に戻っても各大名の禄高が増えなかったため、リストラが行われ多くの浪人（失業者）が生まれた。家康は、これを見ながら成長戦略からの脱却を図る。均衡戦略である。島国を閉鎖し、海外からの物流、人流、情報の制御をし、身分の統制と射幸心を抑制した。武家諸法度、公家諸法度をはじめ社会の改革より規範を固める戦略である。変革は、成長をもたらすが、予期せぬ新規参入者を生み出し、社会の揺らぎをもたらす。上位と下位の入れ替えが起こりするなど不安定な社会要因生まれやすいのだ。さてさて我々の選択はどうすべきか？ 選択の時が、来たのかもしれない。

■ゴールや意義を必要とする？

「まち塾」や「まちライブラリー」の話をしていると三種三様の反応がある。非常に心をしめしてくれる人。どう反応してよいか分からない人。それで「ゴールは何ですか？」と質問をする人もいる。

砂場で山を造りトンネルを掘っている男の子。

人形の服を替えて遊んでいる女の子。彼らに『君がやっていることには、どういう目的があって、ゴールは何か？』と問うている自分が想像できるだろうか？ しかし、それが大人の世界では当たり前のように繰り返される。

『君の企画の意図は、何か？』『ゴールの設定は、適切か？』『どういう目標管理をしているのか？』『我々は、本当にゴールや意義を見いだせないと何かをやってはいけないのか？』だせないだけで駄目なのか？ ある年を境に忘れてしまったものがあるのではないか？ ピーターパンの絵本を子どもに読み聞かせていた時に記憶に残っているフレーズがある。『み

んな子どもは、空を飛べるのだよ。でもいつの日か大人になったら飛べなくなる。さあ勇気を出して飛んでご覧』

■ 「まち」を背負う人は、「礎」に
「まち」に生きる人は「要」になる

「まち」の活性化を図る試みが全国各地で行われている。どこでも地道で息の長い活動が行われているのだろう。私もかつて東京「都心」の再開発に携わったことがある。一軒、一軒「再開発」の必要性を訴えて歩き回ったものだ。話される方は、静かに暮らしているところに余計な話を持ってきたなど反応する人。もっと俺に利益が出る方法はないのかと考え、頭の中でぐるぐる思惑がめぐっている人。頭では、理解しても体が動かない人。千差万別な反応が返ってくる。どの「まち」にもその「まち」に強い思いを持っている一握りの人とほとんど「まち」のことを考えてい

ない大多数の人に分かれる。このような中で「まちづくり」を語りだすと、当然思いの強い人に引っぱり張られる。喧々諤々の議論が、続き新しい「まち」への「ゆめ」が闊歩するか、昔の「まち」への郷愁かで意見が割れてくるものだ。よそ者が、入り込む余地がどんどん狭まってくるのもこのような雰囲気をもたらす。その中で黙々と自らの営み続けている人が透けて見えるのもこの瞬間である。「まち」に生きる人だ。思いが強すぎると「人」とぶつかり「邪魔」にされながらも「礎」になることもある。自然に生きていくと「要」になって人の拠り所になることもある。どちらの人になるのかは、人それぞれだ。

■ 「分母」を求めるのか、「分子」になるのか

「まち」の活性化を議論すると人口の流失による「人」の母数に話がいく。『これだけ人が減っていては、何をしてもうまくいかない』『企業を誘致しよう』『産業を興そう』『観光による来街者を増やそう』という具合だ。もちろんお店をやるにも旅館をやるにも自治体経営でも人が多ければ、収益的には助かるだろう。一方、一人、一人の「人」にとっては総数が増えても幸せな生活が保障されることにはならない。一人一人の人としての幸せは、各々の人の価値観によるのだから当たり前である。人が、人として輝けるのはその人がどれだけ身近な人に頼りにされているのか。周りの人に役立つと思っただけでいいのか。そんな関係性を求めているようにも思う。大都会のように人の多いところにいるとその実感が少なくなり、地方とか過疎だといわれている地域にいと逆に自らの存在感が大きく感じられる。「分母」の多いところで

の「自分」と少ないところにいる「自分」の違いである。若者が、東京より地方へ行こうとしている。その気持ちも、分かっている人がどれだけ政治や企業経営に携わっているのか？ 社会の成熟度が問われているのかしれない。

■図書館の「神様」を「本」から「人」へ

世界最古の図書館は、アレキサンドリアにできたと言われている。王の力の源泉として世界中の「知」を一同に集めることにしたのである。この時から「図書館」の首座は、「本」になった。パピルスや羊皮紙、木片の時代からグーテンベルグの印刷の発明から今日までこの「本」の地位は揺るがないものがある。人の「知識」がそこに詰まっているからだということだろう。でもその「本」を書いたの

は、「人」である。図書館では、「人」は「本」を盗んだり、本を傷つけたりしないようにするための管理対象になる。「本」という「神様」の危険分子ともいえるだろう。だから少し大きな声を出すと静かにしろ、飲み物や食べ物を持ち込むな。鞆は、ロッカーに預けるとなるわけだ。そんな図書館を「半日」ジャックすることになった。「旧東京都立 日比谷図書館」、現在の「千代田区立 日比谷図書館」だ。普段は、「本」が主役として置かれている閲覧ルーム全てを開放してもらい、そこかしこに「人」の輪を作って、語らい、学び合いをした。「人のライブハウス」という集まりだ。五十三名の話題提供者とそれを囲む人たち。総勢二百三十名以上の人が、数名で一組、合計で三十二組に分かれて図書館全館のここかしこで熱く議論した。人があふれ熱気に満ちた図書館の絵は、なかなか見ものであった。なぜこれをしたのかは、明白な理由がある。

まず「図書館」の主は、「人」である。「人」と「人」が自由に話をする、学び合うために輪をつくり議論もする。「人」が主役で「本」が脇役であることを知ってもらいたいからである。それと大勢の人が集まることに意義があるのではなく、小さな集団がたくさん発生して、密度の濃い、人間関係が生まれる中で「学び合う」ことが大切である。そして「学ぶ」対象は、けっして有名な人でもなく、身近な人である。その中に輝いている人がたくさんいる。そして誰しもが、決意ひとつで輝く人になれることに気づいてほしい、という思いからだ。まさに「まち塾@まちライブラリー」が目指している姿をほんのひと時ではあるが、図書館の中で実現できたのである。これからこの原石がどうなっていくのか、それは参加した人、触発を受けた人、思いを一緒にしている人達の行動にかかっているよう

に思う。本当によい人達に出会えた。ありがとう！

第二編 人との出会い

- 人との出会い。楽しみと感謝
- 図書カードと山田文具店
- 西小山商店街に溶け込むクリエイターたち
- 奥多摩の自然の中で起業した若者
- 二万冊の私設図書館を創ったおじさん
- 十万部の離島新聞を作る
- 百年続くカフェを目指した編集者
- 墨田の文化交流拠点になったカフェ
- こだわりカレーを探求しつづけるカフェ
- 「イギリス」に憧れて創ったカフェ
- 大阪万博に魅せられて創ったカフェ
- 医療現場と患者を繋げるまちライブラリー
- 調剤薬局と「健康まちライブラリー」
- お寺の縁、「仏縁」が「学縁」に変わる
- 木のまちライブラリー
- 寄贈されたある柔道家の「本」
- 吉野の杉に惚れた女性建築家
- 故郷、大阪で見つけた輝く人

第二編 人との出会い

□ 人との出会い。楽しみと感謝

まち塾@まちライブラリーをはじめめるにあたって前述のように多くの人の知恵とアドバイスと勇気をもらってスタートができた。しかし、誰が手を動かすのかということが一番の問題である。最近、リタイア後の活動について相談を受けることがある。多くの人は、それなりに組織での地位があり、部下がある環境で育った。私も同様でこういった人が、新しい活動を組織外で立ち上げるのが一番大変。コピーすら自分でとらない。メールはなんとかできて自分でプレゼン資料やホームページを作れない。部下任せの生活からの脱却がはじまる。私も同様で自分に言い聞かせながら自らの手を動かす。苦戦しながらプレゼン

資料やチラシを作っては、一からやり直す連続だった。

ただ私が恵まれていたのは、隣席の女性スタッフが、いろいろと手伝ってくれた。更にその隣のデザイナーが、「まちライブラリー」の「タコ」マーク入りのデザインをしてくれた。お願いしたわけでもないのにいつのまにか机に置いてくれた。三田佳央里さんと石井あゆみさん感謝、感謝。それ以外にもいつもまち塾をやるよと可能な限り参加して黙って受付をし、後かとづけをしてくれる仲間もいる。村上玲子さん、風間正利さん、土井直樹さん、多田知弥さん、野口直子さん、里形玲子さん、大久保奈美さん、やすいじゅんこさん、角谷典子さん。この人たちをはじめ多くの皆さんの善意でなりたっている「まち塾@まちライブラリー」だ。楽しい、ありがとう。

■図書カードと山田文具店

「まちライブラリー」をはじめめるにあたってどうしても視覚的に意図を理解してもらおう必要を感じた。私が最初にこだわったのは、図書の「貸出カード」だ。懐かしい思いをする人は、一定の年齢に達しているはずだ。小学校や中学校で本を借りる時に使っていたカードだ。「耳をすませば」という宮崎駿さんの作品でも主人公の少女が、前に借りた男の子の名前にときめくシーンを覚えていた人はたくさんいるだろう。かつては、公共図書館でもこれが利用されていた。でも今では端末処理で味気なくなっている。この「貸出カード」には、無機質になってしまったサービスを「顔」が見える関係に戻す象徴的な思いがあった。いろいろ探してみると三鷹にある「山田文具店」という懐かしの文具を売っているお店があるとのこと。早速に行って「図書カード」

を買ってきた。その後、オーナーの山田麻美さんにインタビューした。

当時のインタビューから

◆山田さんが、お店をはじめるときのきっかけはなんですか？

私は、この近くで地域密着型の雑貨、家具店で七年ほど働いていました。その仕事は、第一子が生まれた時にやめ、二年ほど専業主婦をしていました。しかし、子育てだけではなく少しは働きたいと思っていたところ前勤めていたお店が現在のところにコーヒーストアを出すことになり、そこを間借りする形で文具店を始めました。

◆お店の特徴をお聞かせください。

昔、懐かしの文具を中心に販売しています。商品は、一言でいえばロングセラーものです。前のお店でもバイイング（買付）をやっていたのですが、ロングセラー商品というのは、大きく売れることはないがコンスタントに売れ続ける。また仕入先も安定していて手間がかからないと思えました。お店に来て買っていただくお客様が、昔ながらのセルロイドの筆箱を子どもや孫に見せて会話がはずむなどロングセラーものには世代を越えた価値があるように思います。

またディスプレイも私の感性を大事にしています。大手の文具店では、機能別に商品をわけるとしてありますが、それでは目的買いになりやすく買い物の楽しみが見出せません。ぶらりとお店にきた方が、何かを発見できるようなディスプレイを心掛けています。

◆個人経営を試みている人にアドバイスは？

この店をやるときに主人は、3つのことが大切だと言ってくれました。

「知識」「経験」「知恵」です。私の場合、雑貨や家具の販売経験が長く、「知識」と「経験」はありました。後は、顧客層を掴む「知恵」です。三鷹というまちは、ちょっといいものが売れる「まち」だと思います。青山のような都心とは違いとがり過ぎたものは売れませんが、ちょっといいものは、少し高くても売れます。逆に非常に安価なものは、量販店系で十分ということになります。それぞれの地域ごとの客層を見抜く「知恵」が大切ですね。

◆なるほど、大切な視点ですね。他に何かありますか？

これは、お店のスタッフの人にも言っているのですが、次の三つが大事だと思います。「売れるものを仕入れる、売りたいものを仕入れる」「売れるようにディスプレイする」

「そして会話をする（接客）」です。若い人の様子をみていると最初の二つはとてもうまくできる人が多いですね。しかし、最後の「会話（接客）」が得意でない人が多いように思います。物を売るといふより人とのコミュニケーションが一番大切ではないでしょうか。

◆最後に今後の夢や抱負はありますか？

特にはないです。お店を増やしたりしたいとは思いません。いいものを仕入れ、いいものを売るのが大切。その時にお金がなくても、よいものを仕入れ、届けるようにする。よいお店にしていくのが第一です。

この人に出会って確信した。身近な人にこそ師匠がいっぱいいるなど。

■西小山商店街に溶け込むクリエイターたち

手取屋岳夫さんは昭和大学病院の心臓外科医。彼と「健康を学び合うまち塾」の打合せをしていると「西小山」に素晴らしいフリーパーを作って、配布しているラウンジがあると教えてくれた。さっそくラウンジを訪問することになった。オーナーの加藤雅明さんは、建築家でこのまちに十年ほど前に移ってきたそう。商店街の一角にある古民家を改装した設計事務所兼自宅をつくり、その次に同じく商店街の古民家を「西小山ラウンジ」というダイニングバーに変身させた。次に、フリーパー「24580」（ニシコヤマ）を作ったまちの人、お店や地域情報を発信するようになった。フリーパーの質は極めて高く、プロの写真家、ライター、編集者が全て手弁当でやっているとのことだ。本来、相応の報

酬をもらって雑誌や本を作っているメンバーが、逆に一人五千円出し合って作っているという。まさに逆転の発想だ。普段の仕事では、クライアントの要求に従っていることが多いのだが、この「24580」では、自分たちの創作力を存分に出せる。その為の五千円なのだという。出版社に勤める秋月康さん、カメラマンの木村雅章さん。西小山のライブハウスをつくり文化イベントを誘致する高橋耕太さん。どの人たちも自らの表現をする。その為の機会を作り出すことがいかに大事か。「まち塾@まちライブラリー」の進め方だと再認識した。

この「西小山ラウンジ」と「西小山スロー」でも「まちライブラリー」の本棚がある。どのように溶け込むか？

■奥多摩の自然の中で起業した若者

奥多摩と聞くと山登り、キャンプ、川遊びなど週末に訪れる場所と考えがちである。そんな奥多摩で起業した若者がいる。菅原和利さん二十四歳。彼は、学生時代の課外活動で奥多摩と出会い、その自然と人に愛着を感じこの地で起業をすることにしたらしい。彼の相談相手になったのは、奥多摩線の鳩ノ巣駅直ぐにあるカフェ「山鳩」のオーナー原島俊二さんだ。「いくらなんでもここで起業するのは無謀だ」という説得にも屈せず、菅原さんは「アートマンズ」というチームをつくり「奥多摩をもっと知ってもらおう活動」をすると挑戦を開始した。手さぐりの事業活動が開始される。「自然の中でのウエディング」「森で合コン」「自転車を利用した山下り」等いろいろなアイデアを実施している。昨年の夏には、

福島の子ども達に地元の人達が林業や農業のこと、奥多摩での生活のことを教える活動もした。今まで地元の人を活動に取り込むのに苦勞していたが、この時ばかりは多くの地元の人が協力をしてくれ、其々に満足をしてくれたそうだ。この活動を通じて彼は、「ここで生涯事業をする」と決意を固めて「アートマーズ」を株式会社にした。菅原さんから感じるのは、素直な気持ちとゆるぎない決意、起業家がありがちなおごりは無いが、社会活動家がありがちな所詮お金にならないことをやっているとあきらめもない。しいていうなら「不転な決意の社会事業家」の顔が見えてくる。菅原さんの生き方に多くの人がひかれていくのが見えるようだ。この奥多摩「山鳩」にも「まちライブラリー」が誕生した。山登りに来た人も、川遊びに来た人も、地元で生活する人もこの「まちライブラリー」で出会えることを期待したい。

■二万冊の私設図書館を創ったおじさん

和歌山の商店街に二万冊の蔵書がある図書館がある。この図書館は、個人の方で誕生した。大阪の会社に勤めている石田通夫さんは、ぶるいの本好きで、大阪の自宅に多くの「本」があったので最初自宅を「図書館」にして持ち寄ってくれた人には、「本」を貸すという私設図書館「ミルキーウェイ」をつくったそうだ。その後、どんどん蔵書数が増えて近くのマンションを借りて私設図書館を移設したが、更に和歌山への転勤を期に和歌山市と連携した前述の「図書館」をつくるにいたったそうだ。和歌山の商店街も地方の商店街にありがちなシャッター通りになっている。その一角にあった電気屋跡の地下を「私設図書館ミルキーウェイ」にして、運営をボランティアがしているとのことだ。実際に見てみると地下

の壁一面に各種蔵書があり、本格的な図書館の趣だ。違っているのは、いろいろな本棚があり、机や椅子も持ち寄りのものが並んでいて手作り感あふれる場所になっている。石田さんが、この図書館をやろうと思った理由を聞くと「もともとは、本でなくてもよかったのだが、物があふれて捨てるだけではもったいないと思った。できればあるものを誰かとシェアすることが大切だと考えたからだ。その点で本は、比較的簡単に持ち寄れるし、貸出も可能。他の家具や物ではこうはいかないのでまず本からはじめよう」ということだ。「もったくない」発想。上品な大阪のおじさんが、打ち出した「図書館」が提案する世界は奥が深い。

■ 十万部の離島新聞を作る。

日本には、離島が六千八百四十七あるそうだが、その離島に注目して、離島での活動や情報を発信しようという人がいる。鯨本あつこさん、二十九歳。彼女は、離島を対象とした機関新聞「リトケイ」の発刊にこぎつけた。とても理解できる規模を越えている。週刊誌で一番売れているのが「週刊文春」で六十万部と言われているから想像するだけでも凄い。「離島経済新聞」というウェブ版を出しながらの挑戦だ。「島」の情報は、一つ一つでは小さな情報である。でもそれを集めたら「おもしろい」ものになる。それをもとに人が、「島」を訪れる。「島」のものを買ってくれる。これが目的となってスタートしたらしい。情報のロングテールを集めて情報媒体にする。個人の思いがあっただけでできる凄さがある。鯨本さんは、まだ二十代。これから生きる若者が、

彼女の周りにたくさん集まってくる。新しい時代を予感させる活動だ。「まち塾@まちライブラリー」で話を聞かせてもらいたい一人だ。そしていつか「季刊リトケイ」あるところに「まちライブラリー」もできるといいなという「ゆめ」が膨らむ。

■百年続くカフェを目指した編集者

西小山ラウンジで入谷の人と会う。今村ナオミさん。編集者でありカフェオーナーである。毎日散歩する道筋に古民家を発見。いつ見ても「私をもっと活かして」と呼びかけてくるように感じたそう。思い切ってその家を借りたが、最初の二年は、編集の仕事が忙しくてなかなか手つかずのままだった。一念発起、ニューヨークに住んでいたおりに数々のカフェを歩き廻って研究してきたカフェのイメー

ジを頭に自分たちの手で改装することにした。カフェのデザイン、壁のペンキ塗り、珈琲の淹れ方の研究、カップの選択とネーム入れ。すべて一からのスタートだ。一つ一つこなししていく中でなんとかスタッフも集まり、営業を開始したそう。最初の一年は、手探りの連続だったそうだが、次第にスタッフがとても優秀な人達だと感じてどんどん彼女たちに任せるようになった。珈琲の淹れ方はもちろん、売り物のパンケーキの焼き方、接客の対応、スタッフのシフトづくりまで何から何まできちんと進めてくれるスタッフを得た。今村さんの信頼が伝わって、信頼に応えようと頑張っているスタッフの動きが伝わってきた。そんな感じた。人を信頼する。信頼に応える。そんなふう自然とチームワークが生まれている。このカフェに多くの人が集まるのは、オーナーとスタッフの自然で暖かい人間関係によるのだろう。今村さんのゆめは、「百年続

くカフェ」だそうだ。百年後、今村さんは生きていない。でもカフェは生きている。「まちライブラリー」もその一角に置いてもらっている。

■墨田の文化交流拠点になったカフェ

東向島珈琲店。友廣さんがいつも出入りしている珈琲店だ。この場所によく行くことができた。モーニングサービス注文して待っているとは色々な人達が入り出している。どうやら一番の特等席は、マスターが珈琲を入れているカウンターだ。四席程度しかない。ここに次から次へと常連と思われる人がくる。それをさりげなくマスターが、紹介しあったり話をふったりしている。絶妙のタイミングを利用して人と人を繋げているのがよく分かる。まさに触媒。マスターの名前は、井奈波

康貴さん。彼は、この珈琲店をはじめの前は、都心のホテルで務めていたそうだ。自然で優しい物腰はその経験からきているのかもしれない。井奈波さんは、ホテルでは宴会とかを担当していたそうだが、ある時にダイニングの担当となった。今までは、お客様の顔が見えていたが、それが急に見えなくなる。そんな中でお客様の顔が見える仕事をしようと珈琲店をやることを決意したそうだ。色々な物件を検討してようやくの思いで現在の地に店を構え、その中で人と人を紡いでいる。そこから数々のイベントやプロジェクトが生まれている。まさに東向島の触媒人、カタリストである。とそんなことを考えていると絶妙のタイミングでモーニングセットと美味しい珈琲が出てきた。「まちライブラリー」もお仲間に入れていただいた。ありがたい。

■こだわりカレーを探求しつづけるカフェ

東京スカイツリーの足元、押上に古いアパートを改装したカフェがある。通りに「創作空間 スパイスカフェ」とある。

ここのオーナー伊藤一成さんは、元イタリアンのシェフ。伊藤さんは、毎年お店を一か月休んでインドやスリランカにカレーの味を探求する旅に出るそうだ。ここまでカレーにこだわる伊藤さんの店には、はっきりなしに人が訪れる。決して便利な場所ではない。どこにでもある下町のまち角の一角に位置している。この店の存在を知る人だけが訪れる場所になっていく。この伊藤さんの話をじっくり聞ける機会を持ちたいと訪問した。落ち着いた店内の席で野菜カレーと海老カレーのペアセットをいただき極上のカレーの味を堪能しながらコーヒをゆっくり飲んでいく。ガラス窓には、午後の日差しが優しくはいつてくる。

しかしその外には、新たなお客様の列が出来ていた。「カレー道場」の主である伊藤さんのお話は別の機会にすることにした。厨房で真剣な目をしながら会釈する伊藤さんに別れを告げながらここが「まちライブラリー」になることを「ゆめ」見て出直すことにした。

■「イギリス」に憧れて創ったカフェ

大阪梅田から一駅。中崎町というまちがある。細い路地という路地にカフェや雑貨屋やギャラリーが点在している。遠くに見える高層ビル街とは、およそ百八十度違う風景が広がっている。その一角に「キッチン」というカフェがある。町屋を改装して創った可愛いカフェだ。ここのオーナー、松下由以子さんは、ぶるいのイギリスファンだ。七十年代から八十年代のUKロックにはまり当時の音楽雑誌

を宝にしている。家具も全てイギリスの家具である。また「食」にはこだわり、単なるカフェではなく「ゴハンヤ・カフェ」と称している。ここにも「まちライブラリー」をいふことで訪問した。夕暮れの中に柔らかい明かりを灯すスタンド。まるでイギリスの旅で出会ったような空気だ。イギリスといえは、「コーヒー・ハウス」の原点でもある。十七世紀から十八世紀に最盛期を迎えた「コーヒー・ハウス」は、近代化にまつわる多くの人と情報を呑みこみ新たな文化を生み出したと言われる。中崎町で何がうまれるか楽しみに松下さんの話を伺いたい。

■「大阪万博」に魅せられて創ったカフェ

大阪天満橋。旧淀川のもとに八軒家浜がある。ここは、江戸時代、京都へ上る船のターミナルがあった。八軒の茶屋があったことからそう呼ばれるようになったらしい。三十国船といわれるものだ。隣の北浜の界限にある米蔵には、全国の米が集められ大坂繁栄の絵図が見えるようだ。この天満橋に「エクスポ・カフェ」がある。「大阪万博」をテーマにしたカフェである。その存在は、随分前から知っていたが、そのオーナー、白井達郎さんにお会いしたのは、「まちライブラリー」の話をしにいく時がはじめてであった。大阪の「まち塾」を手伝ってくださっているやすいじゅんこさんと角谷典子さんの三人で連れ立って入った。店内には、壁や棚に「大阪万博」の模型や資料がところ狭しと展示されている。懐かしい思いがよみがえる。ちやうど私の小学

校六年の時が、大阪万博になる。卒業アルバムにもたくさん万博の写真が載っていたように思う。当時、この天満橋に住んでいた私にとっても「大阪万博」は、永遠につづく幸福な未来図そのものだった。白井さんは、当時高校生で「万博」に魅せられて、「万博会場」でアルバイトをするようになり、それがきっかけで万博関連資料を集めるようになったそう。壁の「万博会場」の模型を見ているとやすいさん達が、「エキスポ・パフェ」を注文した。出てきたパフェは、プレートにバナナやヨーグルト、アイスクリームが不思議な展開で配置されている。それを持ってきた白井さんは、一つ一つ説明してくれる。このバナナが、ソビエト連邦館でこのこんもりしたアイスクリームが、アメリカ館。月の石が目玉だったが、その石は、アポロ十一号のものでなくその後に行ったものだった。日本館は、そのヨーグルトで桜の花びらにデザインされ

ていた等々詳細な説明がつづいて思わず話に引き込まれてしまう。ぜひここで「まち塾」をやり、白井さんの話をゆっくりお聞きしてみたいものだ。同じ時代に生きたものとして「大阪万博」は、人生に多くの価値観をもたらしてくれた。それが何だったのか。立ち止まって考えてみたい。白井さんの「ゆめ」は、カフェに留まらない。このカフェに集まった人や情報を更に体系的に整理して情報発信していく仕事を行政とするそう。元気な当時の大阪に学ぶということだろうか。と思いを巡らしていると同伴の女性陣から「パフェが解けてしもうた」とため息交じりのつぶやきが聞こえた。食い気は、万博の魅力をも上回る。

■医療現場と患者を繋げる「まちライブラリー」

二〇一一年四月、東京でのまち塾のオープニングイベントの四日前、突然の胸の痛みと呼吸困難で救急車で病院に搬送され集中治療室に担ぎ込まれた。幸い大事に至らず、痛み止めが効き、管だらけの体に気付くと同時に、参集したまち塾をどうするかが一番の気がかりになった。幸いまち塾も私が不在の中、仲間の方でなんと実施できた。この間、病院で二週間過ごすことになったが、これが新たな「まち塾@まちライブラリー」につながる。現在の病院は、複雑で高度なシステムと医師、看護師等医療従事者の懸命の人的な努力でなりたっている。高度な技術を駆使した検査機器で検査し、電子カルテに入力された各種検査から日々の検温まで全て統合化され、治療を受ける。医師、看護師の説明も適宜行わ

れる。何事も心配いらない体制である。しかし、誰もが忙しそうに動き回る病院内に会話は少ない。患者や家族はいくら高度に管理された医療を受けていても心配なものには心配だ。心配や不安を取りのぞく最良の薬は、コミュニケーションだ。医師、看護師、患者、家族の会話がどれだけされているかが大事である。現代の医療現場で言葉は交わされているが、会話は、されているだろうか？ 医療関係者や患者や家族、健康に関心のある人が、日頃から平場で対話ができる環境を作っていく。そんな「ゆめ」を昭和大学病院の心臓外科医、手取屋岳夫さんと共有できた。「健康を学びあうまち塾」だ。心臓の話に留まらず、骨粗鬆や先端の「骨」の治療。風邪薬から抗がん剤までの「薬」の話といろいろな立場からの問題提起や質問が出る「まち塾」だ。これからも「乳がん」「血圧」についても学び合う。癌

と戦って前向き生きていこうとしている人も一緒に学んでいる。挑戦はこれからだ。

■調剤薬局「健康まちライブラリー」にする

久保（北）恵子さんは、タレントで薬剤師、一児の母親と三つの顔を持つ。彼女の「ゆめ」は、勤める日吉の調剤薬局を「まちライブラリー」にすることだ。地元の医師、薬剤師、患者が自由に対話できる環境を創ろうとしている。薬局は、全国どこでも同じような「顔」をしている。清潔感はあるが無機質だ。院外処方をごくどころでもらうのか迷うくらいだ。薬の説明は丁寧にしてくれる。でもお互いの対話はあまりないように思う。この環境を替えようというのだ。久保さんから相談を受けた時、私は「失礼ながら『薬局』は、かつて団体旅行で繁盛していた近代化を売り物にしたホテルのようだ」と話した。モダニズムという形式を大事にするなかで機能を果たして

いるが、落ち着くとか感性の部分が欠けてしまった場所になったところは多い。薬を必要とする時くらい気持ちが悪く場所にいる。その思いを実現するために「まちライブラリー」を薬局の中に創ろうというものだ。久保さんの挑戦はこれからだ。

■お寺の縁、「仏縁」が「学縁」に

お寺とは、葬式や法事で訪れるか、古刹へ観光目的で行く人が多いだろう。しかし本来ならお寺には、普段から気軽に顔を出せる雰囲気が必要ではないのか？ それに挑戦しているお寺がある。四谷の陽運寺というお寺である。お岩さん祈願で有名なお寺である。毎月一日、祈願祭に十数名の人が来る。若い女性が多いのも場所柄だろうか、それとも境内の雰囲気がおしゃれなためだろうか。新しいお

寺の在り方に挑戦している若い副住職とその活動を支える奥様やご家族の輪が場の明るさを生み出している。「まちライブラリー」もその中で誕生した。住職、副住職、奥様やご家族の本を持ち寄り一つ一つ丁寧にメッセージが寄せられている。奥様の手書きのポップも付けてあり気軽に手にとれるようになっていく。参拝する人もそこに本を持ち寄ってくれた。「かつて苦しんだ時に読んで元気をもらえた『本』です」と、そっと本棚に置いて行ってくれる。次の機会には気軽に読める「本」も置いてくれる。人への思いが、一つまた一つ広がっていくように思う。「仏縁」が「学縁」になっていく。

■信仰の「道場」が「まちライブラリー」に

東京で「仏縁」が「学縁」になりつつあるこの大阪北田辺でも仏門を信仰する「道場」が「まちライブラリー」に挑戦することになった。三十畳はあろうかという広い道場の一角に二百冊くらいの本が整然と並んだ「本棚」が出来ている。これからここに「学びあい」の仕組みを創ろうとしているのが木村皓一さんだ。近所の人や信者の人に「まちライブラリー」の活用を呼び掛けている。写経をはじめめたり、読書の会をはじめたり。挑戦は、これからだ。高齢者が多い場所にふさわしい学びあいの「場」をつくってもらいたいと応援に行った。参加者の顔には、各々人生が刻まれている。人生を充実したものにしていける鍵は、自らの中にある。大阪北田辺のまちに溶け込んだ「まちライブラリー」の模索が始まった。

■木のまちライブラリー

吉野の杉を買い、皆で手造りの「まちライブラリー」を創ろうというワークショップをした。「アイエスマちライブラリー」の二期拡張だ。六年前、最初に創った「アイエスマちライブラリー」は、専門家に改装を依頼した。今回は、同じビル内での拡張だが、別の道を選択した。入居しているテナントの人や近所の人と一緒に木工仕事をしながら一緒に造った。三十五センチ角の四角い箱を六十個作り、三段に積み上げて板を渡して「本棚」に、二段に積んで「机」に、一段で長椅子にするアイデアだ。アイエスビルの入居者で建築家の笠原啓史さんが考えてくれた。木工工事の指導は、小牧啓一郎さん。お二人の指導と援助が、共同してつくった人の輪を広げてくれた。同じくアイエスビルの入居者である前川さんは、建築学を先行したシステムデザイナーで

ある。前川浩平さんの静かなサポートが、チームワークを作り上げてくれた。今、本棚には、参加者が、持ち寄った「本」が並べられている。思い思いの本棚とブックエンドが、「アイエスマちライブラリー」の趣をだしてくれている。吉野杉の匂いがする「まちライブラリー」だ。

■寄贈されたある柔道家の「本」

名古屋にいた亡くなったご両親の家とその家財や本を整理するので引越しの手伝いに来ないかと誘いをうける。訳も分からず新幹線に乗って駆けつけると味わいのあるお屋敷に着いた。既に室内は、足の踏み場もないくらい多くの品々が出されていて持ち出すものと捨てるものとに振り分けの最中であった。私の担当は、「本」である。相当な読書家と見えて

戦前、戦後と多岐にわたった本がある。その量は、相当なものであり一日で片付けられるのかと途方に暮れながらも本棚に飾られている本を眺めていた。暫くすると亡くなったお父様の顔が見えてくるようであった。柔道家として成功され、柔道連盟でも要職を務められて、名古屋の大学でも後進の指導をされていたようだ。柔道やそれに関連する書物はもちろん充実していたが、名古屋の空襲や戦争中の悲惨さを紹介する本も出てきた。身近に犠牲になられた人がおられたのかもしれない。

小説や美術、歴史に関する本も多数ある。私もかつて読んだ本や改めて手に取りたい本にも出会えた。「のらくろ」や「サザエさん」といった漫画本も充実している。全巻そろえての収集も多い。どの分野にも精通したいという凝り性な方だったと見受けられる。その中に癌で倒れた女性建築家の本を見つけた。アークヒルズの建築に深くかわり、かつて私

が携わっていた「アーク都市塾」でも当初から講師としてお世話になっていた建築家だ。四十代での夭逝だった。情熱的な彼女の生き方がよみがえる。後で聞くと、彼女と同じ癌治療の専門医師に診てもらっていたそうだ。不思議な出会いをしたようだ。この方の本は、今、大阪の「アイエスマチライブラリー」で生き返っている。吉野杉の匂いにつつまれて。

■吉野の杉に惚れた女性建築家

吉野の魅力は「自然」と「杉」と「人」。吉野の魅力を一人でも多くの人に知ってもらいたいと活動している建築家がいる。内田利恵子さんだ。内田さんは、谷町の町屋を改築し、魅力的な空間に変えている。事務所も趣のあるお医者さんの診療所を改装して作られている。そこに『やま まちライブラリー』がで

きる。「やま」と「まち」が出会う場となつてくることを目的とした「ライブラリー」だ。オーブニングのトークイベント『本木トーク』には、吉野山の山守七代目の中井章太さんも来る。既存の原木市場中心の販売から消費者へ直接訴えかける商品開発を模索している若き木こりの棟梁だ。まさに「やま」と「まち」の出会い求められている。新たな出会いから新しい吉野ファンが生まれる姿を見届けたい。

■故郷、大阪で見つけた輝く人

幼稚園のころ一緒にバスを待っていた近所の幼馴染に「まちライブラリー」で再会した。昔から馴染みのビルで手造り腕時計の工房とお店をやっている。秋友清孝さんだ。彼とは、小学校、中学校と同窓だが、その後音信もなく四十年近い歳月を経ての再会である。私が

遠い昔にさってしまったまち角でおしゃれな空間を作って頑張っている。大阪の天満橋、谷町地区は大阪府庁や中央官庁の出先機関が隣接する都心の一角で、大阪城がある上町台地という台地の北端に属する。かつては、繊維業で栄えたまちで相撲の「たにまち」という言葉もこの地から生まれたという。小学校の同級生の多くがそうであったように彼の家も私の家も繊維業に関連する仕事をしていた。そんなまちもかつての賑わいが消え、商店だったところにオフィスビルやマンションが立ち並び趣を一新した。同じまちに卸のボタン屋さんだったところが「ボタンギャラリー」になっている。こちらのオーナー岸本知子さんも同じ小学校、中学校、高校を出ている後輩だ。岸本知子さんは、今、このまちの文化活動のリーダーとなっている。毎年、近くの児童公園を音楽の広場に変えてくれる。まちの中にあるお店や住民を巻き込んでのお祭り

だ。かつてを知る人は、このまちはさびれた
という。私もそう思ってきた。でもこのまち
に住み、働く人に一人一人会っていくなかで
違った「まち」に見えてきた。「人」が活き活
きとしていることが「まち」を元気にさせる。
「まち塾@まちライブラリー」の目指す「人
起こし」が大切だと思った。

後記

「まち塾@まちライブラリー」は、動き出してまだ十カ月。その間に多くの方にお世話になりました。原点を忘れないためにも現段階で感じたことを記述した。また、「まち塾@まちライブラリー」は、多方面で活動しているためはじめてお会いする方も多い。それぞれに思いを持って集まってくださる方へ、私と私の仲間がどういう思いではじめたのかを知ってもらいたいと筆を進めた。まだ十分整理、推敲していないところも多々ある。また私からの視点で描いたので登場者の思いや意見が十分反映されていない点多々あると思う。あくまで私から見た点描であるということでお許しいただきたい。またの機会に訂正、加筆させていただくことをお誓いしたい。そのうえでこの冊子が「まち塾@まちライブラリー」のご理解に役立てば幸いである。

改めて今日までご協力いただいた皆様にお礼を申し上げるとともにこれから初心を忘れずに「まち塾@まちライブラリー」を少しでも皆様の楽しみや憩いの場にしたい。これから皆様のご参加、ご支援の程をお願いして後記とさせていただきます。

二〇一二年一月

まち塾@まちライブラリー提唱者

磯井純充

磯井純充（いそい よしみつ）略歴

「まち塾@まちライブラリー」提唱者

- 一九五八年、大阪市中央区内平野町生まれ。根っからの関西人。
- 一九八一年 中央大学卒業後、森ビル（株）入社。二年目より広報と故・森泰吉郎元社長の秘書業務を担当。
- 一九八六年 再開発の現場へ。六本木再開発の立ち上げを担当。
- 一九八七年 二九歳の時に、文化事業（教育事業）立上の為異動。故・森泰吉郎社長が旗を振り、実験的「アーク塾」を開催。翌年一九八八年に「アーク都市塾」をスタートさせる。
- 一九九三年 森泰吉郎氏逝去 「アーク都市塾」の継続。
- 一九九六年 赤坂アカデミーヒルズ立ち上げ、その後、森ビル所有ビル全域をインターネット化（M―事業）する事業を立上げる。
- インキュベーションオフィス「メディアヒルズ」を設置。ソフトバンクとの合弁による建設発注サイト「シー・エム・ネット」、日経新聞との合弁による地域ポータルサイト「イーヒルズ」等、立ち上げ事業に携わる。
- 二〇〇三年 「六本木アカデミーヒルズ」にて会員制ライブラリー事業を考案し、カンファレンス、スクール事業を併設する文化施設「六本木アカデミーヒルズ」事業を総合事務局長として推進。
- 二〇〇五年 同年四月、アカデミーヒルズを離籍し、社長室文化企画部長に就任。その後、上海の展望、カンファレンス立ち上げのサポート役を担う。同年九月、社長室広報部長に就任。

二〇〇六年
二〇〇八年

取締役広報室長に就任。
取締役ヘリコプター事業室長兼森ビルシティエアサー
ビス株式会社取締役副社長へ就任。

二〇一〇年

（財）森記念財団に出向、個人的に長年に亘り携わってきた教育事業の経験を活かし、「まち塾@まちライブラリー」提唱し始める。全国各地に現代版寺子屋「まち塾」とその活動拠点「まちライブラリー」の設置を呼び掛けている。

現在は、賛同者と共にその応援をパワーに、大阪、東京をはじめ、全国と結ぶ「まち塾@まちライブラリー」の構想を実行中。

「100のまち、100のものがたり、10000人の元気人」を探し続けている。

<http://www.machiyuku.org>

<https://www.facebook.com/machiyuku>

まち塾@まちライブラリー

徒然草

礧井純充著

二〇一二年一月十六日刷り

発行者

礧井純充

装丁

石井あゆみ

校正

三田佳央里



まちライブラリー
MACHI LIBRARY

う
へ
・
・
・

